



子ども、大人も 笑顔で集う



食堂」がオープン!

越前市「みんなの食堂」

実行委員会代表 野尻富美のしりふみ

子ども高齢者も、一緒に
楽しむ場所と時間がほしい

スタートは平成16年秋の病児デ
イケア（病児・病後児保育室）
「ままのて」がきっかけでした。

子育て世代の我が家と同じように
困っている家庭があるのでは？と
いう素朴な疑問からでした。

始めると、保育園が休みの時の一
時預かりをして欲しい、障がいの
ある子を預かって欲しい。そんな
声が多く届
きました。



高齢者から
は、こじん
まりしたデ
イサービス
なら行きた
いという声

を聞き、平成20年春に複合型デイ
サービス「てまり」を次の事業内
容で始めました。



① 高齢者のデイサービス

（小規模）

② 障がいの者のデイサービス

（放課後等デイサービス）

③ 障がいの者のデイサービス

（生活介護）

④ 小学校六年生まで利用

できる学童保育

⑤ 未就学児の一時預かり

⑥ 世代を越えた地域住民との
交流事業

高齢者のデイサービスと学童保
育以外は定員1人〜2人で、ワン
フロアで一緒に過ごし、「うる
さい」と高齢者から子ども達が
叱られたりもしますが、互いに当
たり前に過ごすことを大事にして
います。

このように「てまり」では、
サービスのすき間を埋めて、いろ
んな方を受け入れようとしてしま
が制度にとらわれない自由な居場
所が必要なのではないかと感じて
いました。

定年間もない男性は、奥様との
老後を楽しもうとしていた矢先に
奥様に先立たれ、「一日誰とも喋
らない日があるんや」。一人暮ら
しの女性は、「一人でごはん食べ
ても美味しくないの」。認知症の
主人を介護している女性は、「家

に2人できるとしんどい」。小学
校までは毎日登校していた子が、
中学に入って不登校気味になった
など、それぞれに辛さを抱えてい
たからです。

そこで26年秋には越前市の委託
事業の「認知症カフェ」と自主事
業を併せて「てまり茶屋」をオー
プンし、年代を超えて誰もが気楽
に集える場の提供を始めました。

しかし、その中で、やはり、夕食
をみんなで食べる場が必要なの
はと考えるようになりました。み
んなで賑やかに食べて楽しかった
な。ようし！明日も頑張ってみ
よう！と思える夕食です。そんな



時間を一緒に過ごす中で、ちょっ
とした問題の解決の糸口がみつか
ることもあるのではないかと思っ
たのです。

「みんなの食堂」へ
市民が寄付金や食材で支援

「子ども食堂」の開設が全国で
ニュースになっていましたが、私
は、地域にいるのは、子どもだけ
ではない！貧困は確かに辛い事情
の一つだけれども、それ以外の辛
さが日々の生活の中にはたくさん
ある！と痛感していました。そし
て、可哀想な子（人）だけが来る
食堂ではなく、誰もが来られる
「みんなの食堂」を運営できな
いかと考え始めたのです。

平成28年の年賀状で、日頃から
信頼しているKさんに「子どもも
高齢者も障がいのある方も、みん
なが来れる食堂を実現したい」と
添えました。Kさんとの話し合い
で2人で「みんなの食堂」をやろ
うと決意しました。運営は二人を
中心としたボランティアでするこ
とにしました。そこに至るには福
祉関係の仲間や行政の方からの温
かいアドバイスがありました。

決意はしたものの最初の課題は
資金です。仲間のアドバイスを受

越前市に「みんなの

けて、個人一口2千円、法人一口5千円の寄付を募り、三月初旬から1ヶ月で約30万円が集まり、食器や道具類を揃えました。毎月の寄付を申し出てくれた社会福祉法人、食材の提供を引き受けてくださった企業や商店の方々、私たちが挑戦しようとしていることを認めていただけたという喜びと責任を感じました。

期待と不安の中で4月20日にオープン。約30人の参加者でした。メニューはハンバーグ。お手伝いの方もたくさんで大騒ぎしながら食事にたどりつきました。でも、終わって気がつけば調理配膳が忙しく利用者の方のお喋りが出来ず大反省でした。それでも、高齢者や小中学生が多く来てくれたこと、その中に不登校気味になっていた中学生がいたことは嬉しいことでした。

参加者は毎回30人以上 子ども達もお手伝いで活躍

オープン以来、毎回の参加者は30人を超えています。最初は子ども同士、高齢者同士での垣根がありました。今では高齢者の近くに子どもが座り、高齢者からの言葉に小学生がちよつと照れながら

答えると高齢者に笑顔が広がっています。

初回に、緊張気味に入ってきた中学生、今は、「ただいまー。今日のメニューなに？」と聞いて来ます。別の中学生は、なぜ学校に行きたくないのか話してくれるようになり、先日には「なんか学校に行ける気がしてきた」と嬉しい言葉。子どもと一緒に母親は愚痴を話してくれるようになりました。80代のおばあちゃんは必ずエプロン持参での参加です。

私達はどのエピソードも大切にしたい。支援なんて大袈裟なことではなく、自然に寄り添い、私達の経験やネットワークの中でできることは何でもしたいと思っています。

初回の開催前、相談がありました。実はその日が誕生日とのこと。急でしたが知人をお願いしたところ素晴らしいケーキを届けてくれました。そのケーキを囲みお祝いをした時の嬉しそうな表情。自分の名前が書かれたチョコプレートも大事に持って帰りました。この記憶が大きくなってからも残ってくれるといいなと思います。

その後、毎月、誕生日祝いをするようになりました。

ある日、一生懸命お手伝いをしてくれた小学生がいました。ご褒美にアイスクリームをプレゼント。それを聞いた別の子ども達もお手伝い開始。さては、ご褒美狙いか？でもお手伝いはいいことと推奨したところ、続々と可愛いお手

伝いさんが登場しました。自分で出来ることを増やしてくれるのは嬉しいことです。



地域で支える「みんなの食堂」 目標は多くの「支店開設」

実施回数についても悩みました。本来は「いつ来ても開いている食堂」がよいのですが、まずは継続優先で月2回のスタートになりました。参加者が30人を越える今では、同じ場所で回数を増やすよりも、別の場所での支店？開設がよいのでは？とも考え始めています。

開始から3か月。当面は、毎回を振り返りつつ「みんなの食堂」の定着に力を注ぎ、参加の方々が「また明日も頑張ろうっ」と思っただけで満足することを願います。次のメニューを考える日々です。「みんなの食堂」にはテーマがあります。「地域で育つ・地域で暮らす」を「地域で支える」です。子どもだけ、高齢者だけの地域ではないはず。貧困だけが辛いのではないはず。辛いこと、ちよつとしんどい事、困った事、嬉しい事、誰かに聞いて欲しい事、どれも地域の中にあるはず。誰もが気軽に集える「みんなの食堂」。私たちも楽しみながら目指したいと思っています。